



TITLE:

表紙ほか

AUTHOR(S):

---

CITATION:

表紙ほか. 研究報告 2004, 18

ISSUE DATE:

2004-12

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/134444>

RIGHT:

# 研 究 報 告

## 第 18 号

- 主語の文体論 ..... 廣 川 智 貴 (1)  
——クライストの『決闘』を中心にして——
- 言葉をめぐるたたかい ..... 熊 谷 哲 哉 (23)  
——シュレーバーと雑音の世界——
- Sehen im Wörterverbindungsraum bei Rainer Maria Rilke ..... 浅 井 麻 帆 (39)  
——Eine Wandlung vom Sehen hin zur Rose——
- 『万里の長城』における「男性」と「労働」の位置 ..... 川 島 隆 (63)  
——カフカのシオニズム理解を手がかりに——
- 白いドレスのロッテ ..... 伊 藤 白 (91)  
——トーマス・マン『ワイマールのロッテ』における女性像——
- 道徳的な女たらし ..... 武 田 良 材 (107)  
——ヘルマン・ケステン文学のモラリスト像——
- 現代文学は「歴史」を語りうるか？ ..... 國 重 裕 (127)  
——Karin Askan (1966~) に見る DDR 文学の現在——
- 〔書評・文献紹介〕 ..... (139)

2004

京都大学大学院独文研究室

前略

この度、大学院生が中心になって編集しております『研究報告』第 18 号を発行いたしました。

掲載しました論文につきまして、忌憚のないご意見・ご指導・ご批判をお寄せいただければ幸いです。

草々

2004 年 12 月 15 日

京都大学大学院独文研究室

〒606-8501

京都市左京区吉田本町京都大学文学部内

Tel : 075-753-2826

## 『研究報告』バックナンバー

### 第1号(1985)

- 大川 勇: ある深層の物語の読解 — ムー  
ジルの『特性のない男』研究のための序説  
金子 孝吉: リルケの詩『偶像』について  
田辺 玲子: 関係世界の創出 — アネッテ・  
フォン・ドロスデ=ヒュルスホフの詩人像とそ  
の世界  
奥田 敏広: トーマス・マンの「モンタージュ技  
法」について — 小説形式のパロディ

### 第2号(1986)

- 松村 朋彦: 心理学と小説のあいだ — カー  
ル・フィリップ・モーリッツ『アントン・ライ  
ザー』とその周辺  
大川 勇: 千年王国を越えて — ムージルの  
『特性のない男』における〈別の状態〉の行  
方  
加藤 丈雄: 『公子ホムブルク』について — 死  
の恐怖とその超越を中心に  
奥田 敏広: リオン・フォイトヴァンガーの小説  
『成功』におけるヒトラー像について — 20  
年代の証言の一つとして

### 第3号(1988)

- 加藤 丈雄: ハッピーエンドと悲劇 — 『公子ホ  
ムブルク』の多義性について  
兵頭 俊樹: ヘルダーリンの‘Wie wenn am  
Feiertage...’に現れるディオニュソスの形  
象をめぐって  
竹本 まや: トーマス・マンの『すげええられた  
首』試論  
友田 和秀: 『魔の山』試論 — 主人公ハンス・  
カストルプの形姿をめぐって

### 第4号(1990)

- 津田 保夫: 『ヴァレンシュタイン』試論 — ネメ  
シスの悲劇の観点から

- 千田 春彦: フライダングの『ベシヤイデンハイ  
ト』研究のために — 三つの《はざま》をて  
がかりとして  
宮田 眞治: 覚醒へ向けての夢想 — 『ハイン  
リッヒ・フォン・オフターディンゲン』試論(1)  
千田 まや: トーマス・マンの『ファウストゥス博  
士』 — デューラーの機能についての一考  
案  
斎藤 昌人: 一カフカ像 — 『流刑地にて』をめ  
ぐって

### 第5号(1991)

- 青地 伯水: ホーフマンスタールの『厄介な男』  
における「なおざりにされた生」と「達成され  
た社会性」  
谷口 栄一: C. F. マイアーの『ユルク・イエナッ  
チュ』について — その多義性に関する一  
考察  
津田 保夫: 後期シラーの悲劇論に関する一考  
察 — 悲劇的恐怖の概念を中心に  
斎藤 昌人: 閉ざされる世界

### 第6号(1993)

- 片桐 智明: ヨーゼフ・ロートの『ラデツキー行進  
曲』 — 「比較」と「繰り返し」のモチーフを  
めぐって  
千田 春彦: デア・シュトリッカーの『閉じ込めら  
れた女房』について — 物語の重層構造  
の目指すもの  
福田 覚: 自然模倣説における真理媒介の構  
造(1) — レッシング〈詩学〉に潜在する模  
倣説の輪郭  
青地 伯水: W. ヒルデスハイマーの『リープ  
ローゼ・レグンデン』におけるグロテスクなも  
のについての一考察

第7号(1994)

飛鳥井 雅友: 「しばしばそれは絶望的な対話  
なのです」 — パウル・ツェラーンにおける  
対話の概念をめぐる

吉田 孝夫: 時間の渦 — R・M・リルケ『新詩  
集』の数篇から

片桐 智明: ヨーゼフ・ロートの『右と左』 — 二  
つの方向

第8号(1995)

濱中 春: シラーの『マリア・ストゥアルト』 — 二  
人の女王のドラマ

中村 直子: 分離動詞の認定をめぐる諸問題

飛鳥井 雅友: 神学の拒否と詩学 — パウル・  
ツェラーンにおける神義論の問題

第9号(1996)

中村 直子: 正書法と分離動詞

濱中 春: シラーの『ヴィルヘルム・テル』におけ  
るスイスの風景

片桐 智明: ヨーゼフ・ロートの『百日天  
下』 — ヨーゼフ・ロートのワーテルロー

飛鳥井 雅友: 「胸は張り裂け」 — ゴットフリー  
ト・ベンの場合

第10号(1997)

濱中 春: シラーの『逍遙』における風景をめ  
ぐる — 風景の補償モデルとその矛盾

吉田 孝夫: ローベルト・ヴァルザーにおける寓  
話性(1) — 散文小品『通り(1)』について

片桐 智明: 物語の行方 — ヨーゼフ・ロートの  
『果てしない逃走』と『カプツィン派教会納骨  
堂』をめぐる

第11号(1998)

吉田 孝夫: ローベルト・ヴァルザーにおける寓  
話性(2) — 放蕩息子をめぐる二つの散文  
小品について

片岡 宜行: ドイツ語の与格の分類について

國重 裕: クリスタ・ヴォルフ『クリスタ・T への追  
想』について — その語りの構造

飛鳥井 雅友: ゴットフリート・ベンにおける〈抒  
情的自我〉概念の登場をめぐる

第12号(1999)

片岡 宜行: ドイツ語の与格と空間補足語につ  
いて

吉田 孝夫: ローベルト・ヴァルザーの絵画描写  
について — エクブラシスの観点から

片桐 智明: ハイミート・フォン・ドーデラー四十  
歳の小説 — 『最後の冒険』、騎士とドラゴ  
ンの小説

KUNISHIGE Yutaka (國重 裕): Zwischen  
Phantasiewelt und Wirklichkeit —  
Essay über Ilse Aichingers „Die  
größere Hoffnung“.

第13号(1999)

KUNIEDA Naotaka (國枝 尚隆): *Wilhelm  
Tell als ästhetisches Projekt.*

吉田 孝夫: ローベルト・ヴァルザーにおける通  
俗小説とメルヘンの再話について — 対  
句法に関する試論

第14号(2000)

廣川 智貴: 文体論の理論と実践 — クライス  
トの『ロカルノの女乞食』を例にして

佐々木 茂人: カフカの作品における歌のモ  
ティーフ — 『歌姫ヨゼフィーネ、あるいは  
ネズミ族』を中心に

國重 裕: オーストリア小説に見る《家族ドラマ》  
の変遷 — M.シュトレールヴィッツ『誘惑。』  
(1996)

### 第 15号(2001)

- 伊藤 白：『ブデンプロック家の人々』試論 — 「市民と芸術家」の生み出す四つの類型から
- 池田 晋也：アルトゥール・シュニッツラーの『自由への道』 — 市民的なものと芸術的なもののあいだを浮遊する生
- 川島 隆：カフカの息子たち — 短篇「十一人の息子」読解
- 中原 香織：ヘルマン・ヘッセの『シッダールタ』について — 葛藤の不在がもたらす問題をめぐって
- 羽坂 知恵：日常の「ヒーロー」 — ハインリヒ・ベルの『道化師の意見』について

### 第 16号(2002)

- 佐々木 茂人：東方ユダヤ人難民とプラハのユダヤ人 — カフカの伝記研究のために
- 川島 隆：「こいつは途方もない偽善者だ」 — カフカの中国・中国人像
- 國重 裕：ユーゴスラヴィア内戦をめぐる西欧知識人の応酬 — ペーター・ハントケ『冬の旅』に対する議論を中心に

### 第 17号(2003)

- 池田 晋也：描かれた劇場 — シュニッツラーの短篇『侯爵様御臨席』
- 伊藤 白：ゼゼミ・ヴァイヒプロート — 『ブデンプロック家の人々』における女性像とキリスト教
- 川島 隆：ユダヤ人と中国人 — カフカにおける人種と性愛をめぐって
- 武田 良材：クラウス・マンの『メフィスト』 — ドイツ反ファシズム運動の失敗の反映として

# INHALT

HIROKAWA Tomoki :

Stilistik des Subjekts

- Am Beispiel von Kleists „Der Zweikampf“ ..... (1)

KUMAGAI Tetsuya :

Der Kampf um die Sprache

- D. P. Schreber und die Geräuschwelt ..... (23)

ASAI Maho :

Sehen im Wörterverbindungsraum bei Rainer Maria Rilke

- Eine Wandlung vom Sehen hin zur Rose ..... (39)

KAWASHIMA Takashi :

Kafkas Auseinandersetzung mit dem zionistischen Arbeitskult

- in dem Zyklus *Beim Bau der chinesischen Mauer*, 1914-1918 ..... (63)

ITO Mashiro :

Lotte im weißen Kleid

- Zum Frauenbild in *Lotte in Weimar* ..... (91)

TAKEDA Yoshiki :

Die Moral eines Verführers

- Moralisten in der Literatur Hermann Kestens ..... (107)

KUNISHIGE Yutaka :

Ob die zeitgenössische Literatur als Augenzeuge der Geschichte sein kann?

- Werke Katrin Askanns (1966-) in der DDR Literatur ..... (127)

Rezensionen ..... (139)

## 研究報告 第 18 号

非売品

2004 年 12 月 発行

発行所 京都大学大学院独文研究室

〒606-8501 京都市左京区吉田本町

京都大学文学部内

郵便振替 01060-2-38520

印刷所 北斗プリント社

〒606-0864 京都市左京区下鴨高木町

38-2